新潟県央工業高校創立100周年

モノづくり支える人材を輩出して100年

明治44年の創立から1世紀の節目　新たな歴史の出発点に立つ

三条市の新潟県央工業高校（笹川民雄校長・生徒五百五十人）の創立百周年記念式典がこのほど、同校講堂で行われ、全校生徒を含む七百五十人余りが出席。明治四十四年の創立から迎えた一世紀の節目と、県央のモノづくりを支える人材を輩出し続けてきた同校の歴史の新たなスタートを祝い、第二部の記念講演では東大阪市モノづくり親善大使の青木豊彦さんが「町工場のおっちゃんが語る〝モノづくりの心〟」をテーマに話した。

全校生徒と来賓、ＰＴＡ関係などが出席の百周年記念式典

創立百周年を迎えた新潟県央工業高校

三条工業設立から50周年　もう一つの大きな節目

県央工業は明治四十四年（一九一一年）に三条商工学校として創立。大正十一年に三条商工学校、昭和二十三年に三条実業高校となったあと、三十八年に商工分離による三条工業高校が誕生。その後、平成十六年に燕工業高校（旧三条実業燕分校）との統合による新潟県央工業と生まれ変わった。

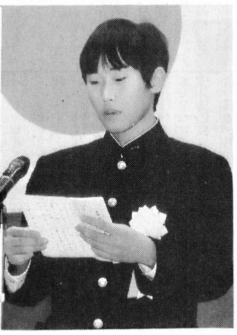
実際の創立百周年は二年前になるが、同校では昭和三十八年（一九六三年）の商工分離から数えて各周年事業を行っており、ことしは三条工業の設立から数えて五十周年のもう一つの大きな節目にも当たる。

同校の創立百周年記念事業実行委員会（川崎国雄会長）が主催した記念式典には実行委員会役員、同窓会員、来賓、全校生徒と教職員などが出席して開会。

新たな出発点への期待を述べる川崎国雄実行委員会会長

祝辞を述べる国定市長

生徒への期待を込めて笹川民雄校長



生徒を代表して喜びの言葉を述べる中条義弘生徒会長

2.4万超す人材を社会に　モノづくりの技術と知識　自らの限界を超えて…

国歌斉唱のあと、実行委員会の川崎会長は「変遷激しい世の中にあって企業の求める姿も変化し、勉強だけの生徒の評価は低くなり、さらに意欲をもってチャレンジが求められる」と述べてから、県央工業の特長でもある部活動を取り上げて「自らの限界を超えようとすることは豊かな感性を養ってくれる。モノづくりの技術と知識を学び、心身を鍛えることは素晴らしい」とたたえ、さらに同校が二万四千人を超す人材をこれまで送り出してきたことなどは「この地域の何よりの財産であり、時代と地域産業とともにあった百年の伝統を受け継ぎ、さらに発展することを確信している」と呼びかけ、この節目を新たな同校の歴史の出発点と位置付けた。

野球部の甲子園出場　昨年の北信越で山岳部優勝　年間スポーツ最優秀校

笹川校長は、県央の工業教育の拠点校となっている同校の沿革を振り返ったあと、「この百年は近代日本の発展と変遷の中で刻まれ、一貫して産業を担う多くの人材を送り出した。日本有数の金属加工集積地のリーダーや中核となり、地域や地場産業の発展に尽くしたことは大きな誇り」と、地元をはじめ、各地で活躍する産業人を育て続けてきた自負を示すとともに、県央工業となってからの十年は、平成二十年の野球部の甲子園初出場、昨年の北信越かがやき総体で山岳部が優勝し、ことし二月に県高等学校年間スポーツ最優秀校を受賞するなど部活動の活躍がめざましかったことも挙げてから、生徒たちに向け「世紀に一度の式典に参加したことを誇りとし、百年の伝統を継承し、さらに高めて後輩に伝えてください」と求めた。

来賓の外山迪子県教育委員に続いて、国定勇人三条市長は祝辞で同校で学んだ卒業生が「県内外で産業・文化の担い手として活躍していることは頼もしく心強い」と述べたほか、生徒には「一歩一歩の努力を忘れず、充実した高校生活を過ごしてください」と呼びかけていた。

祝電披露のあと、百周年記念事業で建設され、先日竣工した総合トレーニング場の目録を同実行委員会・記念事業推進委員会の梨本正實委員長から笹川校長に贈呈。

このあと、生徒を代表して三年生の中条義弘生徒会長(一八)＝燕市新生町＝が「無限の可能性を胸に日々勉強や部活動に励んでいき、これからも地域の皆さまに信頼される学校でありたい」と喜びの言葉を述べ、校歌を斉唱して、十時五十分ころ閉式した。

町工場のおっちゃんが語る　〝モノづくりの心〟

母校に『誇りをもたんとあかんで』

記念講演　東大阪市モノづくり親善大使　青木豊彦さん

午前十一時から記念講演を行った青木さんは、中小企業が集まるモノづくりの町、東大阪で〝メイド・イン・東大阪〟の人工衛星を打ち上げようと、計画から実践へ導いた中心人物。

昭和二十年に大阪府で生まれ、高校卒業後、父親が経営する青木鉄工所に入所、平成七年に社名を㈱アオキと変更して二代目社長に就任。同社は九年にはアメリカ・ボーイング社の認定工場となった。

十四年には東大阪宇宙開発協同組合を設立して理事長に就任。理事長を退任後の十七年に東大阪市モノづくり親善大使の拝命を受け、二十年には新たな人工衛生開発の継続を目的とした有限責任会社「航空宇宙開発まいど」を設立して会長に就任。二十一年一月、人工衛星まいど一号の打ち上げに成功した。

東大阪の工場は平均56～57歳　『若い人集めてこんといかん』と　人工衛星打ち上げに成功

記念講演では、最初に青木さんなどを取り上げたテレビ番組「日本の底力」から自身の出演部分だけを編集した十分余りのＤＶＤを上映してから、青木さんの入場を出席者が拍手で迎えて始まった。

東大阪の町工場から人工衛星打ち上げまでを語る〝おっちゃん〟青木豊彦さん

青木さんは先のテレビ番組の収録や放映後のエピソードを話したあと、同校の百周年にちなんで「創業百周年という会社は日本に二万千六百ある。世界には三千社。日本はそんなに素晴らしい国。百年の良き日、こういう素晴らしい学校に学んでいるのはすごいこと」と生徒たちにアピールした。

青木さんはバリバリの関西弁で講演を進め、「昔、工業高校言うたら入られへんかった。今、うわさに聞くと、大阪ではすべり止めという。けったくそ悪いと思いませんか。私も工業高校。工業高校をもっと高い位置付けにしないといけない」と述べ、技能五輪もかつては日本の天下だったが、今は外国勢がトップに立つようになっていることを受けて「みんなの力で復権してほしい」とエールを送った。

人工衛星の開発・打ち上げに至った経緯では、東大阪の中小企業でも「現場に若い人がいてない。東大阪の工場は平均五十六、七歳と言われ、『え～っ』という調子や。若い人集めてこんといかん。（先輩に）やれと言われた」のがそもそもの始まりだそうで、最初は飛行機の開発を志したマスコミも大きく報道したが、資金面で難しいとなり、「小さな人工衛星やったら作れるかもわからんと切り替えた。そう言うたらマスコミがぱーっと来た。ロケットは運搬用。宇宙を制覇しようと思ったら人工衛星。うまいこと言うた」と振り返り、さまざまな支援を受けて開発が進んだことから、生徒たちにも「一生懸命やれば必ずだれかが見てる。それを経験してほしい。高校は自分の進路を決める大事なとき。百周年の気持ちの中に入れていてほしい」と呼びかけた。

さらに「人の出会いで教えられることはいっぱいある。夢をもって人に会ってほしい。夢をもっていたら、夢をもった人間が集まってくるとおっちゃんは思うわ」と述べていた。

イギリスのブラウン首相など世界の著名人とともに韓国に招かれて講演した際、韓国の学生たちの熱心さとともに、自分に対しての敬意や気遣いを肌で感じた経験から「相手の気持ちが分かるように」などと呼びかけたほか、そのときの学生がビジネスの第一線で働くようになったときのことを思うと脅威に感じているとし、最後は母校に「誇りをもたんとあかんで」と締めくくり、青木さんのエネルギッシュな講演に聞き入っていた生徒たちや他の出席者も大きな拍手を送り、午後〇時二十分ころ終わった。

このあと、同実行委員会では午後一時からジオ・ワールド・ビップで記念祝賀会を行った。